

# 社会言語学・日本語教育と私

稲垣 滋子

## はじめに

ICUにおける38年間の教員生活を終わるに当たって、この紀要の編集者から勧められたのを機会に、私自身が関心を持ち続けてきた、しかしその割にはまとまった研究成果を上げられなかった「社会言語学」が、これからICUという場を生かしてどんな発展が可能であるかを考えてみたい。

そのためにはまず、私の研究・教育歴を記すことから始めなければならない。1964年春に、国語学専攻（方言研究にどっぷり浸かっていた）の博士課程単位取得退学という履歴書を提出して本学の助手となった。それ以来、語学科の一員として、そしてある時から比較文化研究科の兼任教員として過ごしてきた。教育面の仕事としては、助手時代は日本語教育、ファカルティ・メンバーになってからは日本語教育に加えて専門科目を担当し、アドバイザーを持ち、論文指導をし、といった毎日を送ってきた。

この年月を今振り返ってみると、つねに念頭にあったのは私自身の研究と担当科目の関係についてであった。つまり、研究を教育に生かすことができるか、授業や論文指導をしていることが自分の研究の発展にどうつながるかということである。私の場合、担当科目は大きく3種類に分かれ、一つは日本語教育、一つは言語学入門などの基礎科目と日本語学関係の専門科目、そして大学院の科目であった。

本稿では、まず私の研究と日本語教育との関係について述べることにする。日本語教育という実践世界はあらゆる分野の研究を必要とし、またあらゆる分野に貢献できるものであると言えよう。そのうちの一つの分野が私の場合は社会言語学なのである。次に、大学院時代およびICUでの生活の中で私の印象に残った、社会と言葉の関係を表すと思われることがらからいくつかを選んで記し、その後で本稿の冒頭に示したICUにおいて社会言語学的研究をすることの利点について述べることにしたい。

## 1 方言研究と日本語教育の関係からみた時代区分

ICUで過ごした1964年から2002年初めまでの期間を、私自身の研究と日本語教育の関係から区分してみると、①研究と教育分離時代（着任当初～80年代半ば）、②研究と教育一致時代（80年代半ば～90年代半ば）、③役割分担時代（90年代半ば以降）の三つになる。

まず1番目の「研究と教育分離時代」は、私の研究分野は方言学であったため、言葉は人間そのもの、つまり社会・文化と言葉とは切り離せないものとしてしかとらえていなかった。一方、日本語教育では、文法訳読法からオーディオ・リンガルに変わろうとしていた

時期ということもあって、教育の場で扱われる言葉はそれ自体の体系と生成能力を重視したものであった。ICUのみでなく広く世界各地でも使われた “Modern Japanese for University Students” の第1巻第1課に、「私は学生です」につづいて「あなたは先生ですか」とあるのを、ちょっとおかしいと思いつつも、パターン・プラクティスをやっていた。他大学の先生に、「ICUはパタン、パタンで日が暮れる」などと揶揄されながらも、これはこれで、言葉の生成過程のダイナミズムを楽しんでもいたのである。この時期私は、「社会・文化の中にある言葉」と「教育用の言葉」を切り離し、前者は「依存し合う言葉」、後者は「ひとり歩きの言葉」という二面性を持つものとして使い分けていたのだと思う。

そうしているうちに、外国語教授法の変遷に伴って、日本語教育でもコミュニケーションを重視したアプローチが取り入れられ始めた。この時代が私にとって「研究と教育一致時代」となったのである。話し手が基底に持っている言葉を記述し、話し相手や場面、話題、表現意図などによって言語切り替えを行う場合の実態と要因を追究し、言葉の伝播の様相を把握し、言語変化の要因と方向性を探るといった、方言研究でやってきた研究法が、日本語を教える上で役に立つようになった。ICUにやって来る留学生は実にさまざまな文化的背景を持っている。そのため当然ながら、本学の日本語教育に対する期待も多様である。しかし特にこのころから、「役に立つ日本語」を効率的に学びたいという学生が多くなったように思う。これは日本の経済力が世界で認められてきたことと関係があるにちがいない。「役に立つ日本語」とはすなわち、話し手の意図が的確に相手に伝わる表現ができることである。

このころ、方言研究の方でも、「言語地理学」の研究が発展し、さらに「方言地理学」、「言語社会学」などという呼び名を経て、「社会言語学」という分野が定着してきた。方言には「地理的方言」と「社会的方言」とがある、とよく言われるが、地理的要素も社会的要素も扱うことによって、個人や社会の言語活動を研究することができる。

私はこのような、方言研究から発展した社会言語学的視野を持って、折りから発達してきたコミュニケーション重視の日本語教育を実践するようになった。

しかし、この時期が始まって間もなく、限られた時間内に学生の日本語の基礎力と応用能力を十分伸ばすことの難しさにだんだんと気付いてきた。日本語学習者は、何らかの制約の中で勉強しなければならない。日本に留学している学生は時間的制約、自国で学んでいる学生は言語環境の制約、それに両者とも経済的制約も加わって、その学生にとって最短の、最も効率のよい教育とは何かを考えつづけるようになった。そして見つけた答えが、3番目の「役割分担時代」というものであった。

「役割分担」はだれの役割かと問われると答えにくい。あえて言えば社会全体の、あるいは世界のとなる。その意味は次のようである。最初の時期に「社会・文化の中の日本語」と「教育用日本語」とは別のものとして使い分けていたと上述したが、第3期は半分ほど

そこに戻った感じがする。つまり、研究することと教えることの役割分担が必要であり、しかも研究する人と教える人とは同一であることが望ましい。一人の中で両方の役割を持つ、ということになるが、これは一人二役ということではなく、双方の役割が表出の面で異なってくるということになる。研究の面は個人個人の研究者の専門分野に属し、それぞれの学界で通用する水準を持ったものであるべきである。研究の成果を学会で発表する、論文にまとめるなどして世に問うといった学会活動を行う必要がある。そして教育の面では、研究の裏づけのある教育内容と方法をもって現場に臨み、学生たちに知的刺激を与え、次代を担う人材を育てることができるとよい。そういう意味で、一人の人は双方の役割を果たし、社会はそれを支えるといった態勢にあることが望ましい。

これらのことは、私自身は十分にできなかったと思う。研究の面ではつねに壁にぶつかり、方向を見失い、手探りで道を歩んできた。そして教育においても、学生たちの要求とこちらの目指すものとのギャップに悩みながら日々を過ごしてきたように思う。そう思う一方で、つねに同僚や研究仲間から刺激を受け、学生たちにも教室や研究室、またキャンパス内でのやりとりから教えられながら今日まで来たことの重みを、今になって実感できるのである。ここで言う学生とは、日本語の授業を取っている学生、学部や大学院のいろいろな国籍の学生など、あらゆる種類の学生である。いつも時間が十分取れないことを残念に思いながら接してきた。教師と学生とは、立場が違っても共通の目標を持って協働していくという意味で、議論にも熱が入ってくるのだと思う。

## 2 社会と言語のダイナミズムを追究することについて

上述のように、第3期の研究と教育の役割分担の必要性にたどり着いたところで、また時間をさかのぼることになるが、社会と言語の関わりを実感できたことがらをいくつか記してみる。これらは、方言研究のところでは、研究そのものの場合もあり、調査途上で付随的に現れたことがらもある。またICU生活の部分では、授業中や論文指導の中で、あるいは学生と話しているときに得た財産がほとんどである。

### 2-1 方言研究で

#### (1) 「朝 御 飯」

1992～93年に出版された平山輝男他編『現代日本語方言大辞典』（注1）では、基礎語彙約2300項目についての全国調査結果が一覧できる。私はこの中の「東京」部分の調査を担当した。

この辞典の原稿が出版社に渡された後に、東京の下町でも同様の資料を集めるべきだとの声が上がリ、8名ほどの調査班ができた。私もこの一員となり、台東区橋場、千代田区小川町、中央区佃島で、上記辞典と同じ項目を調査した。このうち、佃島の「朝御飯」の

言い方を尋ねたときのことが印象に残っている。

私：朝食べる食事のことを何と言いますか。

話者（70代の男性）：（困った顔をして）朝は食事をしないので名前はありません。

よく聞いてみると、朝3時ごろ起きて何か軽く食べて魚河岸に出かけ、仕事を済ませて昼前に帰宅し、また何か食べるのだそうで、それぞれには特に名前がないと言う。もちろん現在では朝食をとっているはずであるが、自分自身の言葉としてはないということであった。

この答えは、以前東京都檜原村に調査に行ったときに、やはり早朝山の畑に出て、午前中に帰って「オコジュー」を食べると聞いたことを思い出させた。どちらも、1日3食、朝食・昼食・夕食をとるという「常識」を適用しようとしたことを反省させられた場面であった。

## (2) 「ホエル」

1960年ごろ、先輩について「信飛国境（長野県と岐阜県の境界地帯）」の方言調査をした折り、調査項目の一つであるニワトリの鳴き声を尋ねた場面を思い出してみる。岐阜県上宝村で、話者は老年層男性。

私：ニワトリの鳴き声を教えてください。

話者：トテコイヨーとホエルね。

私：えっ、ニワトリが吠えるんですか。

話者：（何を驚くのかという不審な表情でうなずく）

私：では、ほかに吠えるものがありますか。

話者：犬、セミ、カエル、子供…

私：えっ、子供も？

話者：赤ん坊をそんなにホエカスナ、のように言う。

このときすでに、「常識」を破られた経験をしていたのである。推測するに、この地の人々にとって、うるさく感じる鳴き方・泣き方の場合に「ホエル」を使うのであろう。

## (3) 「フケツイところですが」

やはり同じ「信飛国境」調査の折り、今度は長野県側の安曇村で、連絡しておいた家を訪問したときのことである。どの家も歓迎してくれて、特に2年目になると楽しみにして待っていてくれる。私を家に招き入れるときに、2～3軒で同じように、老年層男性の話者が「フケツイところですが」と言ったのが印象的であった。私も訪問客に、「狭いところですが」とか「ちらかっていますが」などと言いわけをするのであるが、この「フケツイところですが」は、文字で書いた「不潔な」という意味とはほど遠く、軽い挨拶として聞こえたのである。

(4) 「ジャスト 3 時」

もう一つ「信飛国境」の話であるが、仲間の一人が行った家（長野県側）で、調査者が何気なく時間を尋ねたところ、70代のご主人が「ジャスト 3 時」と答えたということである。調査は、雪の中の生活に関する言葉など、その村の生活に根づいた話をしている中で、急に外来語が飛び出してきたので驚いたという。この地は、学生のための宿泊施設が多く、毎夏たくさんの若者がやってくる所だからだろうということであった。

(5) 「行きましょう」

平山輝男著『日本の方言』（注 2）には、同じ表現でも地方によって意味が違うために起こった誤解についての実例がいくつか載っている。私たち学生も先生の求めに応じて文章を提出し、それらがこの本に採録されたものである。その中の一つを紹介したい。私が長野市で道を尋ねたときのことである。

私：〇〇号棟はどこでしょうか。

若い主婦：そこならこっちが近いですから、この道をイキマショー。

私はその主婦が一緒に行ってくれるものと思って立っていると、再び「こっちから行きましょう」と繰り返す。ようやく私も、ここでは「イキマショー」は柔らかい命令なのだと気が付いた。

以上は思い出すままに記したものであるが、これを社会とのつながりで整理してみると、次のような項目を立てることができる。

- (1) 「朝御飯」：生活習慣と言葉の関係
- (2) 「ホエル」：名詞と動詞のつながりにおける感覚の相違
- (3) 「フケツイところですが」：言いわけの心理
- (4) 「イキマショー」：古語の残存
- (5) 「ジャスト 3 時」：言語接触

これらはいずれも、社会言語学や心理言語学の研究テーマとなっているものである。

(1)の生活習慣と言葉の関係は、地理的環境・産業・歴史などに関わっていて、言葉の背後にあるそれらの要素を知る必要がある。同じ佃島の調査で、「ご馳走」とは、どんなときに食べるものなのかと尋ねたとき、こちらが予想した「お盆や正月や祭りのとき」という答えは出てこなくて、いつでも食べたいときに食べるものという答えであった。「朝御飯」の場合は若いころの習慣が出て来たのに対し、「ご馳走」の場合は現代の都会生活の中の答えとなっている。

(2)の名詞と動詞のつながりは、例えば「いびきをかく・ひく」のように、地域によって異なる組み合わせがある。感覚としてどうとらえるかという、心理的な要素を考える必要がある。

(3)の言いわけについて、堀川（1970）（注3）は、日本人は話し始めるときに「私のことを申して、なんですが」などと言いわけをすることが多い、として、これを「言いわけの論理」と名付けた。私が観察したところでは、これは日本人に限ったことではなく、ICUのノン・ジャパニースの教員も、発言の初めに似たような表現をするようである。このことは、日本人のくせが移ったものか、あるいは他の文化にも普遍的なことなのかを調査してみる必要がある。

(4)の古語の残存でもう一つ思い出したのは、「ソーロー」を使う老年層の女性に会ったことである。1960年ごろ、平山研究室で伊豆利島の方言調査をした。このとき、一人の話者が、「ヨイソーロー」（いいよの意）と言うのを聞いた。これが中学生になると「イイソー」となる。この表現は、伊豆～湘南、さらに現代ではもっと広く使われる「サ」につながるものであるという、言葉の歴史を見せてくれる例となっている。

(5)のように、山村で、若者が使うような外来語が聞かれるということは、それだけ文化接触・言語接触が起こっていることを示している。接触場面でどんな要素が働いて言語変化が起こるかについては、後述の博士論文のところで述べたい。

## 2-2 ICUで

### (1) あいづち

私のアドバイジーで、あいづちについての卒業論文を書いた学生が何人かいる。卒業論文では、日本人はあいづちをよくうつ、上位者の方がよくうつ、話し手も自分で確認のためにうつなどが指摘された。

あいづちは文化によって異なるもので、フィラーと呼ばれる「えー」「あー」などと共に、話し手と聞き手の心理に関係があることがらである。つまり、相手に伝えたいことをどんな記号を用いて表現するか、相手にどう受け取ってもらいたいのかという心理が働いて使われる。日本社会の中では普遍性を持っているものか、国際交流の場ではどんな現象が起こるかなど、研究の余地のある課題である。

### (2) 挨拶

ある日本語学のクラスで、こんな問題を投げかけてみたことがある。

「ある日の日本語の授業が終わったとき、中国人学生が私に向かって『ごくろう様』と言った。そこで私が『その言い方はおかしい』と言うと、その学生は、『あ、すみません。お疲れ様でした』と言い直した。『それもふさわしくない』と私が言う、『アルバイト先では、社員が上司に対してでもお疲れ様と言ってます』と言う。私は、『会社なら同じ目標に向かって一緒に仕事をするのだからそれでいいけれど、教師と学生では立場が違うから使えないんです』と答えた。しかしその先、どう言ったらいいのかを示すことができなかった。目が合えば『失礼します』でもよいが。みなさんだったら、どう言えばいいと思

うか」

それに対しての答えは至極簡単で、何人かの学生が、「さようなら」と言うのがよいと言う。そこでまた問答となり、結局、学生にとっては、「さようなら」はかなり丁寧な挨拶ということであった。友達なら「じゃあね」「じゃ」「バイバイ」で済ますということである。世代差か個人差かは研究の余地がある。

### (3) アリスの言葉

卒業論文で、『不思議の国のアリス』の日本語訳を取り上げ、アリスの発話の文末表現を分析した学生がいる。十数冊の翻訳を比べた結果、アリスに女言葉を使わせるのが主流の中で、80年代後半になると、「～わ」が1度も使われず、「～よ」「～だよ」となっている翻訳が現れたことがわかった。その後は、翻訳者によって、「～わ」も使われているという。現代の学生たちに聞いてみると、「～わ」はほとんど消滅してしまったようである。現実世界の言語変化と、原作をよりの確に反映させた翻訳との関係は今後もっと追究されるとよい。

### (4) ICU 言葉

「言語学入門」という科目を担当したときに、クラスの学生たちに「ICU独特の言葉」を書いてもらい、一覧表を作って議論したことがある。この分析はいまだにできていないのであるが、最も著しい特徴は略語が非常に多いということである。科目名では2語を4字に略したものが多い。例えば、「レジ本」を見ながら、「インイン」「インジャパ」「インフレ（インフラ）」「インラン」「インクリ」など「イン〇〇」シリーズや、「オハケン」（「お早う憲法」とも。いつも1限にあるため）など、取る科目を相談し合っている。その他クラブ名は「スス」「ムム」「シムズ」の系統が目立つ。また略語以外にも、「ゴニヤ」「ムニヤ」「ナニヤ」「ヤメヤ」のような発想豊かな造語もある。キャンパス言葉はどの大学にもあるが、本学の場合は英語でも語の頭の2音を使って大胆に略して言う点の特徴と言えるかもしれない。

### (5) 社会構造

2001年3月に比較文化研究科で博士号を取った学生のテーマは、「権威構造の変化と言語変化」であった。東京近郊の住民構成の変化が、どのように地域の権威構造を変化させ、そのことが言語変化にどう関わったかの研究である。この学生の論文を指導しながら、私自身が社会科学、特に社会学・文化人類学の研究法にうとく、また心理学的知識が不足していることを痛感した。

方言は社会と言葉の関係を扱うと言いながら、それまで、言語変化の要因と考えられる生活圏、自然環境と地理、人の交流、年代差、言語意識その他のことがらを、無造作に取り扱ってきたことに気付いた。一つ一つの要因は、それぞれの専門的研究の成果にもっと助けてもらうべきであった。このようなことを、学部の卒業論文、修士論文、そして博士

論文の指導の中で、絶えず感じていたのだと、今になってははっきり認識できてきたのである。

ICUでの以上のことがらをまとめてみると、次のようになる。それぞれのところで説明したので、ここでは項目だけを列挙するにとどめる。

- (1) あいづち：コミュニケーション・ストラテジー、他者配慮の心理
- (2) 挨拶：社会における人間関係
- (3) アリスの言葉：男女の言葉
- (4) ICU言葉：命名法
- (5) 社会構造：社会構造

### 2-3 ICUという場における社会言語学的研究の利点

以上見てきたように、社会と言葉の関係を追究しようとする、上に挙げた10例に限ったとしても、社会学、心理学、地理学、文化人類学、統計学その他、さまざまな学問の助けが必要であることがわかる。また、日本語教育の面では、日本の経済力に関する研究にも注意を向ける必要がある。それらの学問の視点と研究法を知り、研究成果を導入することによって、信頼できる研究に発展させることができる。

そしてさらに必要なことは、それらの学問の助けを仰ぐと共に、研究内容の全国的な視野での位置付けを行い、さらに世界の言語における現象との対照まで行うことである。

そこで最後に、ICUという場は、そうした研究のできるところかという問いに答えることにしたい。その答えは、「環境は整っている」である。ICUは日本の大学の中では、社会言語学のような学際的研究を必要とする学問分野の研究と教育に適している方だと思う。その理由は、1) 小規模の大学であること、2) しかも各研究分野の専門家がかなりそろっていること、3) 多様な文化的背景を持った教職員や学生がいること、4) 科目の取り方や専門分野の研究に柔軟性があること、5) 修士や博士など学位取得のための論文審査に当たっては、審査委員会が異なる分野の教員で構成されること、が主なものである。こうした意味で、「環境は整っている」ということになる。問題は、それが有効に活用されるかどうかで、このことは今後期待したい。

### おわりに・そしてこれから

以上、思いつくままに記してきたが、最後に、私にとっての第4期の予感も生まれてきている。それは、2-2 (5) で述べたように、これまで外側から都合のよい部分だけをいただいていた態度を反省させられたことから出てきたものである。そこで、私自身、言語以外の分野の研究を「体験」したいと思うようになった。



今考えているのは、「人間行動学」とも言うべきもので、このうち特に、異文化接触における人間行動を取り上げたい。1993～94年にモスクワ大学で日本語を教えて以来、江戸時代の漂流民の言語行動・非言語行動に興味を持った。このテーマを中心に、人間行動の心理と実際について、自由な立場で追究してみたいと希望している。

(注)

- 1 平山輝男・大島一郎・大野真男・久野真・久野マリ子・杉村孝夫編（1992～1993）『現代日本語方言大辞典』1～8巻・補巻、明治書院
- 2 平山輝男（1968）『日本の方言』講談社現代新書
- 3 堀川直義（1970）「話しことばにおける日本人の論理」『日本人の性格』（現代心理学シリーズ）、朝倉書店